○コウシュンウマノスズクサについて（山崎　敬） Takasi YAMAZAKI: On *Aristolochia kankaoensis* Sasaki

コウシュンウマノスズクサは台湾の恒春半島港口から報告されたもので，その後沖縄の宮古島でも発見された。初島住彦氏（1956）はこれをインドからフィリピン，ニューギニアまでの，東南アジアに広く分布する *A. tagala* と同じとした。また北村四郎氏（1962）はコウシュンウマノスズクサの原記載は無毛とあるが，実際は葉の裏面に細毛が密生していることを明らかにし，*A. roxburghiana* の亜種とした。最近，ヒマラヤや東南アジアの *A. tagala* の標本がかなり集ったので，コウシュンウマノスズクサとの関係が明らかになってきた。

A. roxburghiana は *A. tagala* と同じもので，葉は薄く裏面の細脈は目があらく，肉眼では無毛に見える程度の細毛が散生する。コウシュンウマノスズクサは質が厚く，裏面には細毛が密生し，細脈はもりあがって網目は顕著である。果実は楕円形で *A. tagala* が楕円状球形なのと異る。*A. tagala* は葉が長楕円形であるがコウシュンウマノスズクサは時に長楕円形のものもあるが普通は三角状卵円形である。

コウシュンウマノスズクサとよく似たものが中国高等植物図鑑に *A. tubiflora* Dunn として画かれている。この図のものがこの学名にあたるかどうかは，原記載や梁氏の広西省の *Aristolochia* の記事（中国植物分類学報 **13**: 16, 1975）などから検討すべき問題があるが，中国にもコウシュンウマノスズクサに近いものがあることが知られる。これを *A. tagala* と別種とすべきかどうかは，東南アジアや中国の標本が不充分でむずかしいが，タイでは葉の裏面に毛の少いものからかなり密なものまで変化することからすると，同一種の地理的変異と考えた方がよいように思う。　（東京大学理学部）

Aristolochia tagala Cham. var. **kankaoensis** (Sasaki) Yamazaki comb. et stat. nov.

Aristolochia kankaoensis Sasaki in Trans. Nat. Hist. Soc. Formos. **21**: 251 (1931). Walker, Sonohara, Tawada and Amano, Fl. Okinawa 42 (1952).

Aristolochia tagala Cham. sensu Hatusima in Sci. Bull. Agric. & Home Econ. Div. Univ. Ryukyu **3**: 25 (1956), in Mem. Fac. Agric. Kagoshima Univ. **7**: 25 (1970), Fl. Ryukyu 243 (1971).

Aristolochia roxburghiana Klotzsch subsp. *kankaoensis* (Sasaki) Kitamura in Act. Phytotax. Geobot. **20**: 135 (1962).

A typo, foliis vulgo triangulari-ovatis subtus papilloso-tomentosis, venulis elevatis, fructis oblongis differt.

Distr. Ryukyu (Is. Miyako), Southern Taiwan and Southern China.